

第23章 「誰かに会いたい」ときの居場所を

福島県・ふくしまコミュニティスペースよりみち

たかはしさん



実施日：2019年5月27日 聞き手：前川直哉・杉浦郁子

実施場所：ふくしまコミュニティスペースよりみち（福島市）

【プロフィール】

1992年生まれ、秋田県横手市出身（インタビュー時27歳）。2011年より福島市在住。現在の職業はダンスインストラクターと、相談スタッフ。「ふくしまコミュニティスペースよりみち」に創設期より関わり、現在もスタッフをつとめる。

1. 「よりみち」スタッフになるまで

◆大学進学を機に福島へ

出身は秋田県横手市です。2011年に福島大学に入学し、福島市に来ました。3月に震災と原発事故があったため、入学式は4月ではなく、5月になりました。それからずっと福島市で、現在は2人で暮らしています。

姉が埼玉、弟が名古屋に住んでいます。両親は離婚していて、私が中学一年生になったころにお母さんが家を出ていった感じです。いま、秋田の実家にはお父さんとおばあちゃんが二人で住んでいます。お父さんとは普通に会うんですが、お母さんとはここ2,3年会ってないですね。たぶん、秋田に住んでいると思います。

◆震災と大学入学

2011年の東日本大震災の時は、秋田の実家にいました。もうそのとき、福島大学には合格していたんですね。あの日は秋田も結構揺れて、「秋田が震源なのかな」と思うくらい揺れたんですけど、テレビつけたら福島で原発がって騒いでいてショックを受けましたね。これから自分が行く土地が、大丈夫なんだろうかっていう。福島に知り合いもいなくて、福島がどうなっているのかがテレビだけではよく分からず、すごく不安を抱えながら福島に来たなっているのを思い出します。

水道、電気、ガスとかも1週間くらい止まりましたね。結構田舎だから、復旧が最後のほうだったんですよ。うちは米農家で野菜とかもあったので、食べ物については大丈夫でした。

震災と原発事故の影響で、福島大学の入学式が5月に延期になったのですが、その1か月が結構不安でしたね。私はおばあちゃんと仲が良くて、おばあちゃんと別れるのが寂しか

ったので、1か月延びたからおばあちゃんとゆっくりしようという感じでわりと家にいた気がします。仙台の方の大学も入学式延びたところがあって、そこに進学する友達とも「不安だよな」と言いながら一緒に過ごしていました。

「福大に行って本当に大丈夫なのかな？」というのは、自分でもすごく考えました。友達も「行かない方がいいんじゃないのか」みたいに言うし、親も「行っていいものなのかな」みたいな。大学からは「1か月、入学式遅れますよ」という連絡しか来なくて、なんで1か月も遅れるんだろうってその理由はあんまりしっかり説明されなかったというか、現状がよく分からないなっていうのが正直なところでした。じゃあこの1か月で、福島の状況は変わるのかっていったらどうなんだろうとか、そういう漠然とした不安がありました。実際、入学の辞退者もいたらしいです。震災があるまでは、合格も早くに決まって、すごい「いーい」という感じがあったんですけど、一瞬でなくなりましたね。

◆さとうさんと親しくなる

「よりみち」の管理人であるさとう（本冊子にインタビュー掲載）とは、大学入学以来の仲です。入学式で、もう喋っていた気がします。クラスが一緒に仲良くなりそれからずっとですね。

セクシュアリティについては、わりとさらっとでしたね。さとうがセクシュアリティについて教えてくれた際も、私は「へー」という感じで。そんなに大きい話というよりは、私は「そうなんだ」と感じでした。たぶんその時の自分は、どういう人が好きなのかっていうところに、あんまり性別を意識してなかったのだろうなと思います。

◆高校時代まで

高校時代までは、性的マイノリティについての知識とかは学校でもほとんど習わなかったですし、あまり身近な話題ではなかったですね。もしかすると仲良くしていた友達のなかに当事者がいたのかもしれないですけど、そういう話は出なかったんですよ。ただ高校の時、「隣のクラスの子がレズビアンらしいよ」みたいなうわさ話とかは聞いたりして。私は「ふーん」としか思わなかったんですけど、「レズビアンなんだってさあ」みたいな、その口調が私的には嫌で。悪いイメージっていうことじゃないですか、その口調は。だから、うーん……って思っていたら、その子が中退しちゃったんですよ。だから、そのことで何かあったのかなと、それが結構心残りです。

別にその子と仲良かったわけではないので、何か私ができるとか、そういうのじゃないんですけど。でももしかしたら、何かできることもあったのかなとか……。 「よりみち」の活動やるようになって、たまに思い出します。

当時はとくに差別全般について関心があったというわけでもないんです。ただセクシュアリティに限らず、「あの人、何々なんだって」といった言い方はあまり好きじゃないというのがありますね。自分も結構、小さい頃からいわゆる男の子っぽいもののほうが好きで、戦隊もののおもちゃばかりだったし、洋服もそうでしたし。でも今「よりみち」の参加者さんとかから「女の子らしくしなさいって言われるんですよ」とか「言われてましたね」

みたいな話を聞くこともあって。うちは全くそういうものはなかったな、自由に好きなものを好きなだけみたいな家だったなって、今、思います。そこは、ちょっと感謝していますね。

◆「よりみち」に関わるまで

「よりみち」に関わるようになったのも、さとうに誘われてですね。大学時代、さとうに誘われて「女子の暮らしの研究所」でバイトをしていました。さとうに「ラジオの収録あるから来てみない?」「話してみない?」っていう感じで言われて。私はもう何も考えず、とりあえず「いいよ」ってノリでとことこついていたら、そのまま「女子暮ら」でバイトすることになって。ラジオは、震災の話だった気がします。

「女子暮ら」の仕事は、販売スタッフをしたり、福島県の相双地区などの被災地を訪れるバスツアーを企画したりしていました。被災地を巡るバスツアーでスピーチをする際には、自分は福島について詳しくなかったので震災当時のことを話したりしていました。

「女子暮ら」に興味を持った理由は、単純に「面白いことをしているな」というのがきっかけでした。やってみたら自分の経験としていいんじゃないかと。人と関わりたいっていうのが、大学へ来た目的の一つでしたし、偶然にも被災地にいるので被災地のことを考えてみるのもいいのかな、と思って続けていました。大学来てすぐは自分のことに必死で、被災地にいるという感覚とかではなく、まずは大学生として生計立てなきゃ、などそういうものに必死で全然何も考えられていませんでした。3年生くらいになってようやく落ち着いてきて、他の人のことを考えてみてもいいのかなと思うタイミングで出会えたことが大きかったです。

その後若年女性対象の相談の仕事と出会い、その繋がりですべて『居場所』を始めるから、スタッフやってみないか」とご縁がありました。……話してみると、私ほんと受け身でしたね（笑）。自分としては居場所づくりに関してとても興味があったので、やりたいと言って始めました。

◆ダンスのインストラクターとして

他のバイトとしては、居酒屋と、ダンスのインストラクターもしていました。ダンスは小学校の時から好きで、友達が習っていて、その友達が教えてくれるっていう感じでやっていたんです。ただ両親が離婚してから習い事とか一切できなくなっちゃって、悔しくて「絶対、大学行ったらやろう」と思っていて。それだけは決めていたので、大学に入ったらすぐにダンスサークルに入りました。だから自分がやるだけでも良かったんですけど、福大にある震災ボランティアサークルの人たちが「子どもたちに勉強を教える会やるんだけど、たまには子どもたちと体動かしたいから、手伝ってくれる?」みたいな感じに言われて。当時は、(震災・原発事故の影響で)砂場で遊べない子たちがいっぱいいたのですが、「室内だったらダンスできるじゃん」みたいなこと言われてやり始めたのがきっかけで、子どもたちに教えるのもいいかなって思うようになりました。被災地だと、ダンスとか室内でできる遊びって結構役に立つんだと発見できて、そこからインストラクターのバイトもやるようになりました。最初はボランティアからだったんですけど。

◆メンタルの不調

「女子暮ら」に関わったり、「よりみち」ができたという頃は、大学の終わりの頃だったので、就職活動とかがちらついていた時期でした。ただ就活は全くしなかったんですよ、企業説明会に行ったくらいで。

その時、結構メンタルを壊して大変でした。わりと記憶も抜け落ちているのですが、漠然と「ダンスの仕事をしたい」というののだけでしかなくて。「26歳までやって駄目だったら諦めよう」ということで親と話して決めて。なので、どこかに就職しなきゃという感じではなかったです。

大学2,3年のあたりから、人間関係などでメンタルを壊しちゃって、休学期間もありました。結局、卒業はしていません。高校までは「学校に行けない」という経験は特になかったですし、対処法が分かりませんでした。普通に外には出られたし、友達とも遊べたし、よくある、うつ傾向みたいな感じだったんですけど。そういう時にどうしたらいいかっていうのが全く自分に知識がなくて、ただ、ただ、耐えているという感じでした。食べてくのに働かなきゃいけないっていうのがあって、ずっとバイトだけをしていましたね。最初は学費を稼ぎたくて休学したんですけど、バイトも3件ぐらい掛け持ちして忙しくて、体調悪くなっていった。ちょっと自分の中に余裕がなくなってしまい、学校に行けなくなりました。あと、目的がちょっと分かんなくなってきたら。大学に行く私の目的って何だろうっていうのが……。

結局、大学には5年生までいました。やめるっていう決断をできなくて。でももう、ほんとに極限まで来て、「行く意味ないな」と思って、やっと踏ん切りがつかしました。……個人的な話なんですけど、学費を父と叔父に借りて通っていたので「なんとか大学出なきゃいけない」と思っちゃって。じゃ、頑張るしかないやと思って頑張った結果、駄目で。家族は心配してお金の援助とかをしてくれていましたが、本当は「大学、やめていいよ」と言ってほしかったです（笑）。

結局、やめた後には、お父さんが「やめる決断は大変。人生で一番大変な決断だから、それできたのは偉いね」みたいに言われて。うれしかったんですけど、もうちょっと早く言ってほしかったなとも思いましたね。うちのお父さんは離婚経験者だから、多分そう言ったのだと思う（笑）。

2. 「よりみち」スタッフとして

◆相談という仕事

相談員を始めたころは、自分にあまり自信がなくて「私がやって成り立つのかな」という思いがありました。学校に行けていないというのも、すこし自分を責めている部分だったので「こんな人が相談員でいいのかな？」みたいな……。

続けているうちに、ちょっとずつ自信もついていった感じでした。自分も一応、それなりに苦しかったので、人の苦しいところ、ちょっとは分かるなって。そこは、すこし強みなのかなって思えてきました。

若年女性対象の相談の仕事と比べて、「よりみち」などでセクシュアルマイノリティの人たちと話したり、相談に乗ったりするとき、最初は「自分は当事者じゃないから、何か相談をされたときにどういうふうに言葉かけたらいいのかな」っていうのは確かにありました。でも、私は別に「セクマイさん」というくくりで人を見ているわけではなかったのです。相談事とかは、その人個人のものとして捉えていたからたくさんのお話が聞けたのかなっていうのは、自分の中にあります。

◆勉強して想像する

「よりみち」のスタッフになるということで、セクシュアルマイノリティについての勉強もしましたね。本を読んだり、いろんな研修に参加したり……。セクマイ当事者である友達のことを理解したい、っていう気持ちが強かったので。例えば、さとうとかのことなんですけど。自分の友達とか、好きな人とか、家族とかが困っていたら、その困りごとを理解したいっていうのが自分の中の根底にあって。どういうところで困っているのかなっていうことが知りたいっていう気持ちが自分にあったので。……なんだか私、すごいいい子みたいですわね（笑）。

いろいろ勉強したことで、想像する力はついたかなと思います。「こんなこともあるんだ」というか。「自分事として捉えていく」という当事者意識というのは……この活動していく中で自分でもすごく意識してしてるんですけど、これはなかなか難しいとも思います。

◆「アライ」という言葉

「アライ」という言葉は、自分では意識しないですね。自分がアライですとは、あまり名乗らないです。だって、ただ、人のことを普通に人として関わって、ただ友達つくるぐらいの感覚でやっていることなので。そのことに対して、何か名前を付けられるのって、正直よく分かんないなという感じです。

自分のセクシュアリティについて、聞かれたら答えますけど、特に自分からは言わないですね。「よりみち」の参加者さんや、他の友達にも、セクシュアリティについてはあまり聞かないです。気にならなくて、聞かないで終わっちゃうことが結構ありますね。

今まで生きてきて、あんまり他人のセクシュアリティを気にしたことなかったなと思います。それよりは、その人がどういう人生を送ってきているのかなとか、そっちのほうは私は気になる。比べる対象がちょっと違うんですけど、性別やセクシュアリティは、人と関わる時にあまり必要な知識じゃないです。仲良くなってきたら「どういう人に恋するの？」とか、そういう話はしたいですけど。

◆居場所はたくさんほしい

「よりみち」が始まる時、セクマイどころとかじゃなくて、自分自身も大学で「居場所がないな」と思っていたから、興味があったんですよ。居場所って聞いてわくわくするなって思ってた。

ただ難しいなと思ったのが、ここにも「合う・合わない」はきっとある。合わない人もい

る。みんな結構楽しんで帰ってくれるんですけど、その時いるメンバーによって雰囲気も変わるし、合わない人もいたのかな、とかは思いますね。だから「よりみち」だけじゃなくて、もっといろんなところに、もっとたくさん「居場所」があって、好きに選んで、みんなを救えるような福島になってほしいなと思います。「よりみち」1個だけじゃ、やっぱり、できないなって思いました。

県内に、他にもイベントやサークルは増えてきましたが、「よりみち」は毎週来ることができて、場所も同じ場所にずっとあってとか、一応「安定」が売りになっているのかなと思うので。絶対毎週開催しているっていうのが多分、みんなのうれしいポイントなのかなとも思います。実際に毎週「居場所」をやるって難しいですけど、もうちょっと県内のいろんなところにあってほしいなと思いますね。

よりみちはどんな年代の方でも参加できるのですが集まる年代は若年層なので、それが理由で来なくなってしまった参加者さんもいるのではないかなと個人的に思っています。そんな参加者さんは今、他に安心できる居場所があるだろうか、と心配ですね。

◆遠くからの参加者

「よりみち」には、遠くから参加してくれる人もいます。うれしいのが、会津からわざわざ時間かけて「前泊しました」なんて人もいて。そういうことを聞くと、ほんとやってよかったなって思います。

常連さんだった人で、福島から東京に引っ越した後も、鈍行で5時間ぐらいかけて「よりみち」に来てくれた方もいました。東京に行ったばかりの時期だったからっていうのもあるんですかね。福島に住んでいた頃は、結構、毎週立て続けに来てくれたりとかしてた方なので、「よりみち」がすごく居心地良くなってみたいで。そういう、わざわざ時間かけて来てくれたのは、ほんとうれしいです。

3. 福島や東北の地域性

◆居場所が少ない

福島の課題としてはさっき話したとおり、県内で「よりみち」ぐらいしか安定した居場所がないというのがありますね。こないだ、いわきで「出張よりみち」を開いたのですが、参加者さんが20代後半の方ばかりだったんですね。10代の人とかにも来て欲しかったのですが、誰も来なかった。10代の方は、いわきにはそういうところないとか、福島県にそういうところないってまだ思っているのかもしれないな、もっと周知しなきゃなって思いましたね。まだ浸透してないのかなと思って。いわきに住んでいる方は（交通の便の関係で）福島市よりも仙台や東京に行く方が便利とよく言われていますが、それも関係あるのかもしれないですね。

◆職場のジェンダー規範と結婚プレッシャー

いわきの方々の声を聞くと、やっぱり職場が居づらいついていうのは言っていましたね。20

代のセクマイの参加者さんですが、出会いがないのと、職場でもちょっと居づらいという。職場でも「女性らしくしなさい」とか言われるし、あとは結構、結婚の話ばかりされると話していました。

職場に若者がいない、自分ぐらいしかなくて、あとは上の年代の人ばかりだから、そういう苦しみも共有できる相手もなくて。言われることに対してはちょっと諦めているところもあるけども、それを共有できる同じ年代の人がいないって嘆いていました。愚痴れる相手がない。その時、若者がやっぱ出て行っちゃってんのかな、っていう話をしていました。

いわきにずっと住んでいて、そのまま地元就職した方もいましたし、地元に戻ってきたって方もいましたね。だから「東京いた時は2丁目に行ったり、自由にやってたんだよ」みたいな。「楽しかったんだけどな、でも福島、そういうとこないからな」って言っていました。

福島市での「よりみち」でも、職場の話は出ますね。学校の先生をやられている方とかから、よく聞きます。結婚の話ばかりされるから、飲み会がづらいとか。ある参加者さんが「結婚してないと上の役職につけないよ」と言われたって話を聞いたときは、衝撃を受けました。身近であるんだなと思って、ショックでした。嫌だなと思って。

◆「本家・分家」意識

女性は女性らしく、男性は男性らしくというような話は、東京とかよりも福島県内のほうが強いのかなと感じます。私、そんなに他の地域を知らないのですが、ここに関してはちょっと自分の考えが正しいかよく分かんないんですけど。結構、東北ではいまだに「本家・分家」とか気にするじゃないですか。「本家だからやっぱ長男が」みたいな、「早くお嫁さんもらって、でっかい家建てないと」みたいなのがあって。本家とか分家とかいまだに気にしているのって、やっぱ東北の悪いところなのかなってというのは、結構感じています。

横手の実家でも、こういう話は身近でしたね。私が中学校くらいの時に家を建て直したんですよ。その時に「本家だからでっかく造らないと恥かく」みたいなことを、おばあちゃんが言ってて。私は「そうなの？大変だね」って。だから結構、割と広く造りました。結果今住んでいるのは2人なんですけど（笑）。

◆「家」意識やジェンダー圧力への違和感

そういう話はずっと身近にありましたし、女らしさ・男らしさを押し付けられるのは嫌だなとずっと思っていましたね。セクマイの当事者さんたちに共感できるのは、そういう部分もあるのかもしれないですね。人に圧力かけられるっていうところでは、母と姑の感じを見て結構つらいところもあったし。親戚関係も結構みんな仲いいんですけど、やっぱ分家・本家とかそういうやりとり聞いていて、何か生きづらいなっていうのは思っていました。お父さんも大変そうにしていたんで。

おじいちゃん死んだ時も、家で葬儀やらなきやいけなかったんですけど、ご飯はちゃんとみんな御膳みたいな作って。手伝わされたんですけど、大変そうだなって思いました。業

者を頼めばいいのになって。見栄をはっているのか分からないですけど、結構おもてなしがすごくて。親戚の集まりとか見ていると、大変そうだなと思いましたね。男性はほんと動かずお酒飲んで、女性が台所。私の家族の中だけ見ると、そういう性別による役割とか分業はないんですけど、もっと広い人間関係の中に置かれるとそれが出てくる。おじいちゃんのきょうだいも11人もいて、その本家で、横手には親戚もたくさんいたのでそういう大変さがありました。

こないだ研修で北海道行った時に、「東北ってさ、何かちょっと鬱々としているよね」みたいな話をされて。流れでその分家とか本家の話になった時に「へー」みたいな、笑われちゃって。「こっちは移民だからさ」みたいな感じで。そうなんだ、と思いましたね。

実家には代々のお墓もあります。結構立派ですね。その墓は誰が守る、みたいな話にもなります。そういう地域だと、一人しかいない男の子が「実はゲイで」とか言えないかもしれません。「家を絶やす気か」とか言われそう。

ただ、うちのお父さんは全く「家」の意識ないですね。自分で終わりでいいみたいな感じ。「老後は沖縄とか行きたい、寒いところは嫌だ、雪に殺される」みたいなこと言っています。

◆地方で頑張りたい

私自身は、東京で仕事したい、暮らしたいという気持ちは、今はないです。昔はあったんですけど。地方で頑張りたい、地方を盛り上げたいっていう気持ちが強いんですね。そう思うようになったのは、子どもたちにダンス教えるようになってからです。

子どもたちに、福島っていうか、今いる場所でも楽しんで過ごしている大人がいるな、という感じで見てもらえたらいいなって。ここでダンスするのが楽しいなって思っほしいと、いつも思います。特に技術求めてみんな東京行っちゃうので、悲しいです。頑張っても東京に行って、東京の有名なダンサーに吸い取られていっちゃうんで……。地元好きとは言ってくれるけど、やっぱここで残ってダンスしてくれる人が、なかなかいないのでそこがこの土地でダンスしている私の課題だなと感じます。

東京に行きたいっていうのは、自分のことだけ考えて「行きたい」と思っていました。学びたいと思っていたんですけど。でも秋田から福島に来たら、いきなり東京が近くなった。だから私は自分で通えるし、福島から東京へ学びに行くことはできるので、やっぱ、地域で、ここで子どもたちに技術だけでなくいろんなことを教えたいなって思うようになりました。

◆いろんな選択肢があるよ、と伝えられる大人に

別にダンスだけじゃなくて、物事に取り組む姿勢とか、それこそダンスやっていると、ジェンダー規範っていうか、そういうのを感じることも結構多いので。子どもたちに、そういうのを取っ払ってあげたいなって気持ちもあります。

ダンスってわりと芸術的な分野だから、私はもっと広い、自由な世界かなと思っていました。だけどいざ入ってみたら、ほんとにジェンダーの圧力もばしばしあるし。

私が教えているのは、ストリートダンスの中のジャズです。振り付けに性別は関係ないんですけど、でも結構、世間的には、ジャズやるのは女性が多くて。「女性の体のしなやかさ」

とかを売りにしている人は多いです。実際はあんま関係ないんですけどね（笑）。

男の子も女の子もダンスを習っているのですが、大人になっていくと、どんどん女性のダンサーが減っていきますね。その背景には社会規範も関係していると思います。「家庭に入る」と自由にできなくなるのかもしれない。結婚して子供もいて、でもバリバリダンスしている男性は多いんですけどね。そうすると、ダンスをしている女の子からしたらロールモデルが少ない。その（ロールモデルの）一つでありたいなという思いはあります。

別にダンスだけじゃないんですけど、人生にはいろんな選択肢があるんだよっていうのを教えていきたいなと思っていて。働き方だったりとか、考え方だったり。

おかしな話ですが自分自身も「大学をやめていいんだ」っていうのとか、分からなかったんですよ。秋田にいた頃は、どういう職業やったらいいかとか、進路を考える上で教えてくれる大人が私の周りに全然いなかったの。

だから、いろんな選択肢をくれる大人が子どもたちの近くにいてほしいなっていうのがあって。そういう存在に自分になりたいなと思っています。

◆震災の影響

ダンスを習いに来ている子どもたちの中で、福島イコール原発とか放射能みたいな、そういうマイナスのイメージを背負っている子は多分いないと思います。表に出てこない部分なのかもしれないですが。その辺りを気にしている保護者も、いないと思います。

普段「よりみち」でも、震災の話はほとんど出ないですね。活動する中で、震災の影響を意識することは、正直ほとんどないです。

4. 「よりみち」の成果と課題

◆人と人との関わりが生まれる場

「よりみち」では、参加者さんが定期的に来てくれたりとか、参加者さん同士で「あれ？髪切った？」という話をしていたりするのを見てると、すごくみんなの「居場所」になっているんだなと思います。ほんと、ちょっとしたことなんですけど。そういう「人の変化」って、継続して通わないと気付けない部分だと私は思うので、人と人との関わりが生まれるんだなっていうのは感じますね。参加者さんは、ただ自分の話をしに来ているだけじゃない。他の参加者さんの話も聞いて、居場所を作っている・関わっているなというのを感じます。その時だけのイベントにただ参加する、その場限りの時間じゃなくて、人生の期間を通しての時間になっているのかなっていうのは思います。

参加者さん同士仲良くなって遊びに行ったっていう話を聞くと、うれしいです。よかったって。あと、終わった後に飲みにいこうよとか、そういう話もあるので。人と人がつながる一つのきっかけになれてるんだなっていうところに、やっぱ、やってて良かったなって感じますね。

◆自由な時間を共有できる

毎週の「よりみち」では、トークテーマを決めるときもありますが、基本自由なので「自由に過ごしてください」というスタンスです。みんなでお話して。でも本を読みたい人もいるので、そういう人は結構自由に本を読んだりとか。こっちで話して、こっちでまた別の話してて、1人本を読んでとか。割とスタッフも、自由に過ごしているからだと思います。結構くつろいでいるので。

会話が盛り上がるように、スタッフが話題を振ったりもしますが、盛り上がってきたなと思ったら離れて、みたいな感じですかね。

本を読んでいるだけなら他の場所でも良いのかもしれませんが、たぶんみんな、共有したいっていう気持ちもあるのかな。参加者さんが、自分が買った本を「よりみち」に置いて「ぜひ皆さん読んでください」とかって言ってくれたりすることもあるって、こういうのも結構成果だと思います。

◆行かなくても「居場所」があれば

「よりみち」のパンフレットは、さとうと相談しながら作りました。パンフレットに「誰かに会いたいな。そんなときは、よりみちへ」というフレーズを入れたんですけど、それは何かちょっとさみしいときに「よりみち」を思い浮かべてくれたらいいなという思いからです。来なくても、心の中に「よりみち」が出てきたらいいなっていう思いが、ずっとありますね。それが「居場所」なのかな、と思います。その場所に行かなくても「いざとなったら、あそこがあるし」みたいな。今度行こうとか、よりどころがあれば、それが居場所なのかな。

◆「よりみち」の参加者

「よりみち」を始めた頃は、参加者さんがゼロの日もありました。今はほとんどないですね。去年(2018年)久々に誰も来ない日があったんですけど、その日は猛暑で気温36度とかの日だったので。

参加者さんが別の友達を誘ってくるっていうのは、あんまりないですね。こないだ嬉しかったのが、「仙台よりみち」のときに「パンフレット見て、妹に来てほしいなと思ったんですけど、一応下見で」って人が来てくれて。でも「自分も興味があったから来てみました」みたいな感じで。いいきょうだいですよ。いい関係性なんだね」と話しました。

◆さまざまな参加者

去年、不登校で、同年代としゃべるのが苦手みたいな参加者さんが来てくれたんです。そのときに、どういうふうにつなげてあげられるのかな、難しいなっていうのは、ありましたね。その子は高校生なんですけど、私ぐらいの大人のほうがしゃべりやすいって言っていました。来てくれているから、見守るしかないんだろうなとは思いますが、そういう問題もあるんだなと思ったり。

◆スタッフの確保

「よりみち」のスタッフは結構、今人数がいるほうだなとは思いますが、学生だったりとかして、みんな来れない日がかぶるんですよ、なぜか。コンスタントに入れる人がいないってところでは、ちょっと困ってますね。新規のスタッフはだいたい、さとうが一本釣りしてくる感じです。広くスタッフ募集という感じではないですね。仕事内容だけみると簡単でもこういう居場所作りは誰にでもできるわけではないと感じているので、紹介したような人も、私の周りになかなかいなくて……。

◆アライを増やしたい

今結構自分の中で大きくて、一番難しいなと感じているのが「アライをどうやって増やしたらいいんだろう」ってことです。「よりみち」では「アライの日」を一応やっているんですけど、なかなか参加者さんが来なくて。いつも1人か2人。来てくれるのは、すでに仙台でアライとして活動をしている人だったりして。こちらが想定してる、困りごとを持っている人が来ないんですよ。「これってどういうセクシュアリティなんですか」とか「私の子どもがこうなんですけど、これって大丈夫なんですか」みたいな、そういう人に対して何かできることがあったらいいなと思ってアライの日つくったんですけど、引っかけりません（笑）。

どういう発信をしたらいいんだろうと悩みます。私も周囲の人を見ていると「周りに当事者がいなかったら、セクマイのことって、あんまり考えないことなのかな」って思ったりもします。

でも結局、こういうみんなが困っていることを解決するのって、周りの人が大事じゃないですか。アライが増えていくことが、やっぱり一番いいのかなと思うので。自分では特にアライとは名乗ってないんですけど、そういうアライの人たちを増やしていくのにどういう発信をしたらいいんだろうなっていうのが、自分の中で課題ですね。「よりみち」単位じゃなくても、自分に何かできることはあるのかなって。

自分が「よりみち」で働いていくにあたって、アライの仲間がいないなっていう思いが最近あって。1人だけだとちょっと自信ないというか、もうちょっと一緒にやっていける人がいたらいいなっていう思いがあります。

5. 個人としての思い

◆人の苦しみを理解したい

自分としては「よりみち」で誰かを支えてあげよう、支援してあげようとか、そういう思いはあんまりないです。むしろ自分自身にとっても「居場所」という感じです。

相談員をやる理由でもあったんですけど、人がどういうところで苦しんでいるのかなとかを、人生生きていく中でもっと蓄えたいっていう思いが、自分の中にあって。親が離婚した時、6歳年下の弟と一緒にだったんですけど、ふと「私は弟に教えられることないや」って、結構がくぜんとしたんです。親が別れてお母さんがいなくなった時に、私、弟に何もできな

いなと思って。その時に、やっぱり人生って経験が大事だなって感じました。みんな時間は平等だから、その中でどれぐらい経験できるかっていうところが大切だと思うので。いろんな人の意見とかお話とか聞いて、自分の人間力じゃないですけど、もっと上げていきたいなっていうのが結構自分の生きていく中で大事な部分です。

自分は子どもに何を教えられるだろうっていうのが自分のテーマで、それで大学も教育系を選んだっていうのもありますね。何かを教えようとしたら、やっぱり人の苦しみをいっぱい理解できないと、と思っています。

◆「よりみち」で生きやすくなった

私自身「よりみち」のスタッフをして、だいぶ生きやすくなりました。相談員は、ちょっとつらい時もたまにあるんですけど。「居場所」に関わってから、例えば、他のコミュニティで自分の人間関係の中で嫌だなと思ったことがあっても、「ま、いいや、『よりみち』で話そう」みたいな感じで、私の心の居場所になっているので。

ちょうど「よりみち」のスタッフをやり始める前、スナックで働いていたんです。結構スナックって、女性ってこうあるべきみたいのが強くてつらかったんですけど、そういうのも消化できてきて。

その中にいると、それが当然すぎて、何か「ん？」って思っても自分の意見を言えないことが多かったんです。でも「よりみち」に来て、これは嫌だとか言っていんだっていうのが分かったの。それでちょっと気持ちが楽になったっていうのが大きいですね。

◆家の中にも「居場所」を

最近相談員の仕事をしていても、セクマイの家族さんから相談されることが増えてきて、嬉しいです。でもやっぱり、そういう人にもっと「よりみち」の「アライの日」とかにも来てほしいなって思います。家族の人とかは、特に。

私が結構、家族大好きで、自分の人生のテーマじゃないですけど、家族をテーマとして生きているので。その分、そこに見放されたら、私はほんとに終わりだなんていう思いはあるんですね。

結構セクマイさんで悩んでいる方って、家族との関係とかで悩んでいる方がやっぱり多いから、それがどんだけつらかって、そこは分かりますね。家族に否定されたら、私もう、終わります（笑）。家族がやっぱ機能してほしいなって思うので。

家がしんどいときに取りあえずの避難場所として「よりみち」があるのはいいことだけど、やっぱり家族も居心地いい場所になってほしい。人間なんで、家族の中にも「合う、合わない」は絶対ありますけど、家族の中でジェンダーに関してつらい思いするのは嫌だなんていうのはあります。

◆秋田と福島への思い

出身地の秋田県は、別にセクマイ関係なく、若者の居場所づくりが必要だなと思います。秋田は若者が少なくて高齢化がすごいですし、観光地としてもなかなか来づらいところで。

福島から秋田へもアクセスが悪くて、いつも帰るとき困るんですけど、なかなか若者が寄らない場所なので。

こないだショックだったのが、秋田の不審者情報で「女装した男性が歩いていました。気をつけてください」というのが出たっていうのを聞いて、ほんとに悲しくなって。歩いていて何が悪いんだろう。秋田って結構そういうレベルなんだなって思って悲しかったです。

せっかく私、秋田出身なので、地元のこと考えますね。最初は秋田に戻りたかったんですけど、あんまりにも福島が居心地良くなっちゃって、戻らないって選択をしてしまったんです。でも常に気になっている場所ではありますね、秋田は。

今のところは、これからも福島に住もうと思っています。もう、ダンスの子どもたちがかわいくなりすぎちゃっていますし(笑)。そして、「よりみち」のスタッフは、今後も続けていきたいですね。